
ナティオナル・ノベル

鷹田ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナティオナル・ノベル

【NNコード】

N8564R

【作者名】

鷹田ユウスケ

【あらすじ】

なぜか、パン屋のアルバイトをしていた少年が、名門魔法学校に入学。その裏には闇と院長の思惑があった！！

1 2 院長の言葉と眞実と襲撃（前書き）

突如、魔法使い最上の学校に入学することになったパン屋のアルバイトは、自分の過去に少しずつ疑問を抱いてゆく・・・

『笑顔を見せなきやあいけねえ。じゃねえと、お客様の顔まで暗くなつちまう。』

そういうて教育を受けてきたアルスルは愕然とした。もしかしたら自分が原因でルイ教授が発作を起こしたのではないか。

僕は医務室に行つた。医務室とは地下にあり、大きい。白いカーテンに覆われた一番奥にルイ教授が居るようだつた。

「アルスル君。大丈夫。君は悪くない。ただ・・・話したいことがある。お見舞いの後で校長室に来てくれ。」

「はい。」

僕は奥に行つたすると、エルフの筋肉のついた細い体が下半身のみを掛布団が隠した状態だつた。顔は・・・耳が上に細長く、目も鋭い。それがルイ先生だ。

「大丈夫ですか、ルイ先生。」

僕がそう尋ねると、

「ああ。大丈夫だ・・・ウイスドム君に治療してもらつたからね。知つたかぶりの少女だ。」

「こんにちは。モルガン・ウイスドムです。」

そう挨拶してきた。

「アルスルです。」

お互に頭を下げた。

「アルスル君・・・君が・・・最後の・・・希望だ。」

ルイ先生が、腹筋を使い、必死に体を起こしながらそう言つた。

僕はその声を聴き終えたところで、校長室に行こうとした。

「それでは。」

僕がそういうと、

「私も、着いて行つていいですか？」

といったので、頷き、一人で歩いて行つた。しばらく行き、一番

山岳側（一番奥）に行つた。

校長室、といつても、直径6メートルほどある円形の鉄をどうぐるうか悩んだ。すると、モルガンが言った。

「校長室は、建設当初、最高の防衛技術を注ぎ込んだの。ただ、それでは開けにくいから今では魔法で開くのよ。オペン・ドオール！」そういうと、円形の鉄が時計回りに回りながら地面に埋まつていつた。一人でその奥に行くと、左側に螺旋階段があつたのでそこを上つていくと、円形の部屋の中に本が沢山あり、なおかつ古い地球儀もたくさん置いてあつた。

「いないわね。」

一人で球の内部なような部屋をぐるりと見まわした。壁に沿うようになつて螺旋階段が螺旋になつていて、球の天辺から垂れているシヤンデリアから光の粉が舞い降りていた。その粉は、床で人を形作ると髭の長い老人が現れた。

「よく来てくれたね。」

校長は紫茶しづかを用意してくれた。紫茶は最初は甘くあとは苦いといふ不思議な味なのだ。

「君たちに今日したい話とは……他でもない、エクソシストについてじや。」

祓魔師エクソシストとは、魔法の開発とともに誕生する魔物、悪魔を退治する。闇の魔法のシチュエーション、発音、インスピレーション、心境を変えるだけで新たに誕生することから存在していたが、そもそもその根源を逮捕・暗殺する一掃作戦でその仕事も消えてしまった。

「今から12年前、わしの常識から遙か上空を飛ぶようなことが起きた。」

僕たちは現れた丸い椅子に座つた。

「わしの教え子であつた女性と男性がいた。その一人にはまた、幸せの証ともいえるような子供がいた。その子供は頬を上げ、いつも笑つていた。ある晩のことだつた。当時権力を乱用していたホエア騎士団という軍部の外局の人間が、その家に押し入り、夫婦を引き

裂き、その子供を永久の眠りに着かせようとした。そして、魔法をかけた・・・。その時じや。わしの常識を超えたことが起きた。

モルガンは興味深そうに聞いた。

「なんですか？」

「いやあ。確かに魔法はその子供に当たつた。しかし、何がが・・・。起きた。」

校長は立ち上がり螺旋階段を上がり一冊の本を持ってきた。

「わしの推量では、何者かがその子供に魂を注入していた。本を見せてくると、大人から子供に向かつて矢印が伸びている本だつた。

「その子供は、死? という観念、いや意識を、その時その何者かと共有していた。その為、2の命で1の死に立ち向かい、したがつて、それぞれに半分ずつの命が残ることとなつた。わしの推量では、新数学的に言えば若いほうが生命力にあふれる。したがつて、子供は生きているが、その誰かは、生死の境にいるのではないかと考えてる。」

僕は下を向いた。

「またしてもわしの推量じゃが、その者は・・・お前・・・だと思う。アルスル。」

僕は涙が出てきた。本能・・・いや記憶が確かに蘇つた。

「僕も・・・そうだと思ひます。」

それを聞いていたモルガンが不思議そうに見つめていた。

「確かに精神転生の魔法は、共通の意識・観念を共有することはあります。しかし、死は生命であり、観念ではありません。」

そういうと校長は静かにうなずいた。

「ああ。確かにそうだ。その場合、3つのことが考えうる。一つ目に相手が強大であったこと。相手が強大で、観念・意識の枠を超えた。二つ目にアルスルが強大であったこと。三つ目は何かが起つた・・・そのどれかだと思う。そしてわしは君にこの言葉を贈りたい。『魔法とは、奇怪で枠に当てはまらないものこのことを言つ』こ

「しかし驚いたわ。魔法の歴史上、死の魔法での存在意義について議論されたことが1~2回あった。でもそれより有意義なお話を聞けた。」

しばらく思い出話を聞いていた。

「しかし驚いたわ。魔法の歴史上、死の魔法での存在意義について議論されたことが1~2回あった。でもそれより有意義なお話を聞けた。」

と、モルガンは喜んでいた。

「そうかい。良ければ勉強教えてくれない? 今日、休んじゃったから。」

その時にはすでに、3時限目の基本数学を終えていた。

僕は午後は授業に出ないことにした。モルガンもそれに付き合つて勉強を教えてくれた。分かりやすかつたので、普通の7分の1ほどで終わつた。

すぐにイロも授業を終えて戻つてきたので、今日校長と話したことを一つ一つ教えていった。

「へえ。君が……」

と言つていた。僕自身でもそつだ、なぜ僕なんだろう。まだ校長の推量の段階だから分からんんだろう。

「そういえば、変身学の宿題が出たよ。来週までだ。」

僕とモルガンは顔を見合わせた。二人とも変身学の授業を入れているのだ。

「どんな?」

モルガンが聞くと、イロが答えた。

「新数学との干渉問題。変身を行う際の空間変容についてのレポート。」

僕は手を振つた。簡単な魔法だが、塔の天辺から教科書が降りてきた。

「単元? 変身した時に増えた分、空間はどうなる?」

「は君の父の言葉じやよ。レポートに堂々とそれを書かれたときは鳥肌が立つた。」

というところを開いた。教科書は三秒以上見つめると呪われると
いう噂があるのであまり見なかつた。

「どういう意味？」

まず聞いてしまつた。

「たとえば、マグカップを犬の置物に変えるとするわね。マグカップを二二倍にすると犬の置物になるといつとき、空間に無理やりマグカップ一個分を詰め込むことになるでしょ？」

「うん。」

僕とイロで頷いた。

「すると空間が伸びるの。」

「なるほど。それで空間はどうなる？か。」

「そうなのよ。空間は魔法空間と呼ばれるパラレルワールドに移動されるの。」

教科書を数ページ読んでいくと似たような例題があつた。

ガタンッ！

「何か・・・鳴ったわね。」

しかし、まだ談話室には誰もいないし、九割は授業に出向いているだろう。

「イタズラだろ。」

しかし、不気味だ。

「セ トルエ コロルス オフ シス ソウンド ムスト アップ
アル！」

モルガンが呪文を唱えた。

すると黒い霧が階段を上つてきた。

「霧・・・みんな伏せて！」

僕たちは伏せたがモルガンは伏せなかつた。

「セ ダルク ショウルド ディサップアル！」

闇は階段を下りていくかのように見えたが再びモルガンを襲つた。

「デフェンド ミュ ボドイ！」

そういうとモルガンは石のようくになり床に倒れてしまつた。

霧はターゲットを見失つたようで階段を下りて行つた。

「医務室だ。」

「でも、いま霧が階段を下りて行つた。」

「イロ。これは勇気の問題だ。」

そういうて僕は固くなつたモルガンを肩に乗せて、医務室に連れて行つた。霧は見なかつたが警戒はしていた。

「そうね。自分の体を守るのに石を使うのは・・・」

「ごめんなさい。でも闇の霧だつたんですね。」

モルガンはナースに言つていた。

「闇の霧つて？」

僕が聞いた。

「神格化した魔法使いに付きまとい、殺そつとする。神の敵よ。

「神格化？」

「そう。運命を超えようとした者・運命を作ろうとした者などは徐々に神格化を始め。数年で神になる。そうなれば不老不死。永久にね。」

僕は下を向いた。それは僕ではないだろうか。

モルガンにお願いして神格化の本を貸してもらつた。神格化の例はごく少数らしい。まあそうだろう。世の中の人間全員が運命を乗り越えられるわけではないし、世の中の人間全員が神になるわけでもない。ただ、共通するのは神になつた人間は、何らかの試練を与えられたという事。僕に与えられた試練・・・

「変身学の・・・宿題か？」

まあそんなわけない。宿題が試練なんて・・・

運命では宿題をこなせないかもしない。それをモルガンと協力したせいでできてしまったのでは?

人間の神格化とはいさか不思議なものである。なぜなら、神格化する要因が運命の超越であるため、神格化自体が常識を超越したものなのだ。

と書かれていた本を3度ほど読み返した。はつきり言つと、専門家でもわからないということだ。

そこに霧のことも書いてあった。

太古、神々の時代。悪魔は新たな神の誕生を避けようと、霧を発生させた。そのあと、悪魔と神々はお互いを封印し合つて戦いは終焉を迎えるが、霧だけは封印されず残つてしまつたのである。

と書いてある。つまり、イロか僕かモルガンの誰かが神格化しているのだ。可能性が一番大きいのは僕だ。実際、三人のうち、全員が変身の宿題をもらつているわけだから、家庭内の問題がある、僕ではないだろうか。

「まあ、いいか。」

考えないことにしよう、霧だつて退治できた。もつと遅つてはこないだろう。

暗闇にひしめく柳を背にある男が立つていた。黒いマントは他の魔法使いとも似つかず、異様な雰囲気を放つていた。

「作戦は・・・できたか？」

男性が答えると、暗闇が答えた。

「霧は失敗したようだ。」

男性がため息をついた。

「はあ・・・そうか。何としても、あやつの半分の生を奪わねばならぬ。」

男性が月を見上げながら言つた。男性は周りの墓石を確認した。

そして空いてる土地を見つけ、人差し指で、『アルスル ここに眠る』と書いた。

「次は成功させる。何といつてもあいつがやる気になつたからな。」

男性が暗闇を希望あふれる目で見た。

「それなら・・・問題はないだろ。」

僕は学校で一番細い道を通りて、うそく一本で両端をきちんと照らせるくらいだ。神格化の本を2冊持つて、モルガンに返そうと思っていた。

『おまえは・・・死して・・・命となる・・・』

という声が聞こえてきたような気がしたが、小さな道だし風がなんか鳴つてゐるんだろ・・・ということで気にするのはやめた。だつて、怖いじゃあないか。

しばらく歩いていたら、前から足音が聞こえてきた。

「たしか・・・」

その時思い出していたのはモルガンの使つた呪文。正体現せの呪文だった。

「セトルエ コロルス オフ シス ソウンド ムスト アプペアル！」

すると黒い人影がこちらに走ってきた。

「誰だお前！」

黒い人影は無精ひげの中年に変わった。海賊のようなふしだらな服。これは魔法使いに違いない。

「お前の・・・生命を・・・取り返し・・・者だ・・・悪い・・・

ことは・・・言わない・・・・・・・ その命、頂きに参つた！」

魔力を増幅させる木の杖をこちらに向かた。杖といつても40センチほどだ。杖を一振りすると青い閃光が飛ぶ。それに比べ僕は無力だ。防衛呪文もろくにしらない。知つてゐるのはパンを作る呪文だけ・・・いや、待て・・・

たつた一つの小さな可能性を胸に、僕は手を振った。扇のように上から下に。すると、僕の作ったパンは巨大で、ふしだらな魔法使いを包んだ。すぐに息もできなくなるだろうが、最後に炎でパンに焦げ目を入れた。いささか残酷ではあるが、これくらいせねば。正当防衛の域を超えていよつとも、なんとも感じない。しじうがない。

でも甘かった。パンの中にいる魔法使いは僕に最後に眠りの呪文をかけ、僕を眠らせた。

気付くと、キリストのように十字架に架けられていた。暗闇。周りの魔法使いはみな僕を睨んでいた。僕がいうところの『生の盗人』だからだろう。

「我々の規則には・・・盗人は殺しても良いと・・・そのように記されている。よって・・・そなたを殺してやつても良い。」

そのように耳に小声で話してくるのは暗闇だつた。人ではないのだ。そう、ここにいるのは皆、人ではないのだ。視線を感じるだけで、集中してみればただの草原。暗闇に囚われたのだ。

院長の声が思い出される。僕は生き残ったがもう一人は生死の境にいる。そのしもべなのだろう。皆必死だ。もしも僕がここで自ら生を終わらせたら・・・奴らは驚くだろうか。しかし、両手をふさがれた状態で自らを傷つけるなど、到底不可能。それを奴らが嘲笑つているかにも聞こえた。

そして最後の可能性を待っていた。絶対に現れない可能性。それは、院長だった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8564r/>

ナティオナル・ノベル

2011年5月3日10時40分発行